
ヴィヴィッドサンタとトナカイ物語

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィヴィッドサンタとトナカイ物語

【Nコード】

N7328Z

【作者名】

虹鮫連牙

【あらすじ】

ミッドチルダの聖夜に巻き起こる、小さなサンタクロースの物語。この作品は、Arcadiaにも投稿しています。

事の発端は、一週間前に高町なのはが「皆でクリスマスパーティーをしよう」と言い出したことだった。

元機動六課メンバーをはじめ、いろいろな人達を誘っているらしい。中でも、風邪をこじらせたティアナをスバルが無理矢理連れて行くと豪語していたことは、つい最近の笑い話となっている。

「ねえアルフ、クリスマスって楽しい？」

おそらく、なのはからパーティーの事を最初に聞かされたのはこの子なのだろうと、アルフは自分を訪ねてきた幼子を微笑ましく見ている。

「そりゃあ楽しいに決まってるさー。綺麗なクリスマスツリーの下にはご馳走のオンパレード！ おっきなフライドチキンにかぶりつけてえ、生クリームがたっぷりかつたケーキをペロリと平らげてえ！ ああ、こんなにも幸せなイベントが地球にはあるのかーって、初めてクリスマスを経験した時は感動したものだよ」

終始ニヤけっ放しであるヴィヴィオの表情につられて、アルフも同じように顔を綻ばせた。

一週間前から告知されていたパーティーについての質問を、何故当日の今になってあれこれ知ろうとするのだろうか。アルフは不思議に思っていた。

しかし、それも話を聞いてみれば何て事は無い。なのはがヴィヴィオにめいっぱい楽しんでもらおうと、あえて詳しいことを教えていないのだそうだ。

地球内では広く知られるクリスマスという風習も、魔法世界ミッドチルダにおいては全く馴染みの無いもの。だから、ヴィヴィオがこんなにも興味を示すのは当然なのだろうと、アルフはそっとヴィヴィオの頭を撫でた。

「クリスマスって、チキンとかケーキを食べるだけ？」

「そんなこたあないよ。実はクリスマスには、サンタクロースって
いうおじいさんの伝説があるんだよねえ」

「さんたくろーす？」

もののついでとばかりに、アルフは自分が持ち得る限りの、サン
タクロースに関する話をヴィヴィオに聞かせた。

しかし、後のことを思えば、これが少々まずかったのだろう。

アルフの、身振り手振りを交えた楽しいな説明が効き過ぎたのか
しばらく黙って話を聞いていたヴィヴィオは、徐々に鼻息を荒げて
いった。アルフ自身も楽しくなってしまったせいか、ヴィヴィオの
大きな好奇心を急激に燃え上がらせたまま、話はとうとうクライマ
ックスを迎えてしまう。

そして、アルフはようやく気が付いた。

「……………とまあ、以上がサンタクロースに関するお話……………って、
ヴィヴィオ？」

体を小刻みに揺すりながら、目を爛々と輝かせるヴィヴィオ。鼻
息はさつきよりも勢いがついており、なんだか興奮し過ぎではない
かと思うのは、決して間違いではない。

「ちょ、ちよつと盛り上げすぎちゃったかなあ……………なんてね」

「アルフウ！ お願いがあのお！」

こうなつた子供相手だと、「嫌だ」と言えなくなるのはアルフの
良い所なのかも知れない。

すっかり気分上々のヴィヴィオに頼まれたアルフは、苦笑しながら
も「仕方ないなあ」と言いながら、彼女の願いを叶えるために
支度を始めた。

そして準備が整ったアルフは、自分の成れの果てを鏡で見てから
更に苦笑した。

狼形態のアルフは、その体にありつたけの革ベルトを何本も装着
し、雪滑り用のソリと結びつけた。首にはもちろん、金色に輝く大
きな鈴を下げている。しかも二つだ。

そしてこれもヴィヴィオからの頼みで用意したのだが、赤と白の

カラーリングが目を引く、子供用コートと三角帽子をヴィヴィオに着せてやった。

ソリは、フェイト達がまだ小学生だった頃に皆で雪遊びをした時、アリサがプレゼントしてくれたもの。サンタクロースの衣装と鈴は、やはりまだ子供だったフェイトが、なのはやはやて達とクリスマスパーティーをする時に使った小道具だ。だが、ベルトはクローゼットに入っていたフェイトのものを勝手に拝借してしまった。

「ははっははは、こいつはまた何とも……………」

「やったー！ アルフトナカイさん！」

ソリに乗り込んだヴィヴィオは、手綱をぎゅっと握り締めながら、アルフに言った。

「では、ヴィヴィオサンタ、はっしんしまーす！」

「はいはい」

「だめえ！ トナカイさんはちゃんとトナカイさんみたいに鳴かないとだめですよ！」

「えーっと、トナカイの鳴き声？ ……………ヒ、ヒヒーンッ！」

謎の泣き声を轟かせ、ヴィヴィオサンタを乗せたソリはミッドの大地を滑り始めた。

ザフィーラは、突如として目の前に現れた友の姿に少し驚いた。

しかし、普段から冷静沈着であり、大きな理解力を持つ彼にしてみれば、微笑ましい遊戯であることはすぐに分かった。

「楽しそうだな、ヴィヴィオ」

「うん、すっごく楽しいー！」

満面の笑みで答えるヴィヴィオを見て、ザフィーラの胸も少し温かくなっていた。

その一方で、微妙に困ったような表情を浮かべるアルフが気になるところでもあった。

「アルフ、どうした？」

「い、いや……いつまでコレやってればいいんだろって」

なるほどと、ここでもザフィーラはすぐに理解した。そしてアルフの心境やヴィヴィオの笑顔を見ていると、ますます胸が温かくなるのだった。

「ふっ」

「な、何笑ってるんだよ!？」

「いや、愉快だと思ったのだ」

その一言は、決してアルフを馬鹿にするつもりでの発言ではない。ただ純粹に、ザフィーラが感じたことをそのまま言葉にしただけのもの。

しかし、それがアルフに捻れ伝わったようだ。

ザフィーラも発言した後ですぐに気が付いた。だからすぐさま弁解を付け足そうとしたのだが。

「ああそう。そうですかー。じゃあ………一緒にどうぞー!」

既に手遅れだった。

結び直された革ベルトは、あれよあれよと言う間にザフィーラの体を捕らえていった。

相変わらず落ち着いた様子を装ってはいるものの、ザフィーラは内心で少し後悔していた。アルフと同種の狼形態である自分が恨めしい。

ヴィヴィオサントを乗せたソリには、赤と青のトナカイが繋がれた。

「わあ! トナカイさんが二匹い!」

ヴィヴィオはソリから降りて、嬉しそうな顔でザフィーラとアルフを交互に見比べている。

すると、次第にザフィーラの考えも変わってきていた。

最初は後悔を感じたザフィーラではあったが、ヴィヴィオの無垢な笑顔を見ていると、たまにはこういうのも悪くは無いと思えたのだ。

何ニヤついてるんだい?

アルフからの念話が届き、ザフィーラは今度こそ言葉を選びながら、自分の素直な気持ちを告げる。

この子の笑顔を見てみると、体の中が少しずつ温かくなってくるのだ。そう、まるで、地球で主や守護騎士達と共に過ごした平和な日々を思い出すような、そんな温かさだ……………ガラにもないことだが、こういうのもたまには良いものだと思う

ほうほう。そいつはようござんした。そんじゃあアンタも、ヒビーンの一つくらい鳴きなつて

アルフの念話を聞きながら、ザフィーラは、“ヒビーン”とは何なのかと疑問を抱いた。

「じゃあそろそろいきましょーか、トナカイさん！」

「はいよあ！ ヒビーン！」

アルフがそう言った。

ザフィーラはすぐに理解した。なるほど、それはトナカイの鳴き声なのか、と。

彼らしくもないだろうが、ザフィーラは密かに気持ちが高揚していた。年に一度の日だし、せっかく気持ちが乗ってきたのだからと出来る限りヴィヴィオの笑顔に貢献しようと思ったのだ。

「ならば私も……………ヒビーン！」

「ザフィーラは声が怖いから鳴いちゃだめえ！」

「……………こ、心得た」

何故だか胸の奥が締め付けられるように感じて、ザフィーラは、いつもよりも声のトーンを落として返事をしていた。

そして、自分の隣で体を小刻みに震えさせながら吹き出しているアルフが、少しだけ羨ましく思えたことは、ずっと胸の内に秘めておこうとも思っただのだ。

ヴィヴィオは、アルフの首から鈴を一つだけ外した。そして、それをザフィーラの首に付け直す。

「アルフ、ザフィーラと半分こしてあげてね」

「おやあ？ なかなか似合うじゃないかよー、ザフィーラの旦那あ」

アルフは意地悪っぽく言っただつもりなのだろうが、生憎とザフィーラにはそう聞こえていなかった。

少しだけ凹んだ気持ちも、この鈴のおかげで何とか回復したのだ。なんだか、この鈴のおかげでやっと仲間に入れてもらえたような気分になった。

体をふるって、鈴を鳴らしてみた。心地良い高音がザフィーラの耳に入り込んできて、それが何度も何度も頭の中で響くのだ。

「こういう高音が、欲しいものだ」

それは、クリスマスの雰囲気に乗じてつい漏らしてしまった、彼の本音だった。

ふと、ヴィヴィオの方を見ると、彼女は周囲をキョロキョロしていた。大方、新しい遊び道具でも探しているのだろうと、ザフィーラはさほど気にしなかった。

今度は嫌味などを含めることもなく、アルフが小さく言った。

「あんたの今の姿、はやとかに見せてあげると喜ぶんじゃないのかい？」

「そうだろうか？」

「ああ、きつと喜ぶよ。こういうのはあの子らの好みっぽいし」

そうかも知れないと、ザフィーラは少しだけ笑った。

その時だった。

「はぐあっ!」

「ザ、ザフィーラ!？」

突然頭に襲い掛かってきた激痛。ザフィーラは思わず悲鳴を上げてしまった。

激痛の正体は、ヴィヴィオの手中にあるものが原因だった。

それは、近くにあった観葉植物から伸びている、葉の落ちた長い枝だ。それが、ザフィーラの耳に突き立てられていた。

「トナカイさんのツノー!」

「ザフィーラ、大丈夫かい!？」

「だ、大丈夫だ。たまには……こういうのも、いいものだな」

「血い出てるつてば！」
ヴィヴィオの笑顔に貢献する努力は、まだ終わらない。

ヴィヴィオサンタを乗せたソリは、ミッドの街中をすいすい進んでいった。

アルフとザフィーラの首から下がる、金色の鈴が幸せの音色を撒き散らし、白んだ空の下をどこまでも駆け抜ける。

寒波に凍える人々は、その音色に耳を澄ませて、急ぐ足を止めて、泳ぐ視線で探して、小さな聖人を見つけるのだった。

「HO！ HO！ HO！」

あちらこちらから聞こえる歓声に、ヴィヴィオは気分を良くしていた。頬を撫でていく冷たい風だって、ちつとも不快ではない。

リンリンランラン風を切り、スイスイシャンシャン掻き分けて、ヴィヴィッドサンタは街に行く。

清し夜まであとわずか。ソリを引くトナカイ達の足取は軽く。

聖なる夜まであと少し。帽子を押さえるサンタの心は弾む。

パーティー開始はもう目前。高まる期待はいつまでも踊る。

「ヴィヴィオ、もう帰ったほうがいいんじゃないかい？ ほら、暗くなってきたしさ」

「遅くなると、なのはが心配する。それに夜はもつと冷える」

「だあめ！ 行きたいところがあるの！」

リンリンランラン日は沈み、スイスイシャンシャン月が出て、ヴィヴィッドサンタはどこまでも。

清し夜にはぬくもりを。ソリを引くトナカイ達の気持ちは焦る。

聖なる夜には祝福を。帽子を押さえるサンタの目的は迫る。

パーティー開始は待つてほしい。高まる期待は疲れを知らぬ。

ヴィヴィオサンタを乗せたソリは、ミッドの夜道をぐんぐん進んでいった。

ヴィヴィオが夜のミッドチルダを駆け抜けているちょうどその頃、
なのはが待つ高町家では、既にある程度までパーティーの支度が進
んでいた。

テーブルに並ぶチキンはこんがり焼けているし、サラダのみずみ
ずしさはまるで宝石のように光っていた。

部屋の片隅には、なのはの身長と同じくらいのクリスマスツリー
がある。ちょうどパーティーを企画した一週間前、ヴィヴィオと一
緒に飾り付けをしたものだ。

頂点には輝くお星様。その下には、型抜きされた『メリークリス
マス』の文字をあしらったプレート。そして、アイナさんが作って
くれたなのはとヴィヴィオの人形。

それらを一通り眺めながら、なのはは時計を何度も見返していた。
「ヴィヴィオ、どこまで遊びに行ってるのかな？」

少しだけ眉間に皺が集まっているなのは。

そんな彼女の後ろ、キッチンの方から、焼きあがったばかりのパ
ンを持ってフェイトとはやてが顔を出した。

「ちよつと帰りが遅すぎるよ。ねえ、搜索に出たほうがいいんじゃない？」

「ほんまや。何かあってからじゃあ遅いよ？」

「本当に……帰ってきたらキッチンと叱らないと」

口ではそう言っただけで冷静を装っているものの、なのはの心境もフェ
イト達と同じようなものだった。

せっかくのクリスマスパーティー。なのはからヴィヴィオに贈る、
聖夜のプレゼント。

それなのに、あの子を叱らないといけないのだろうか。

いや、そんなことすら出来ない状態だとしたら。

次第に、不安は大きくなっていった。

ヴィヴィオを自分の娘として迎え入れてから、特別なお祝い事を
したことはほとんど無かった。

『聖王の器』という、複雑な理由と方法でこの世に生を受けた女

の子。正確な誕生日だっけ分らないし、そもそも一緒に過ごした時間はまだまだ短い。

それでも、元気に生きてくれている。自分を母として慕ってくれている。

そんなヴィヴィオに、日頃のお礼の意味も込めて企画したクリスマスパーティー。

これからもきつと、ずっと、仲良しの家族であることを約束するためのクリスマスパーティー。

彼女が自分を頼ってくれているように、彼女もまた自分の支えになっっていることを感謝したくて。そんな感謝をプレゼントしたくて企画したクリスマスパーティー。

だから。

「なのは、早いほうが」

フェイトの後押しも強くなる。

「なのはちゃん！」

はやても決断を急かす。

心臓だっけとどんどん高鳴る。

「う、うん！」

遂に玄関へ向けて走り出したなのはは、ドアノブに手を掛けようと腕を伸ばした。

しかし、その瞬間、玄関が大きく開いた。

そこには人影。

なのはは思わず叫んでいた。

「ヴィヴィオッ!? おかえり! どこに行っけ」

「おっ邪魔っしまーす!」

やって来たのは、なのはが呼んだパーティーメンバーだった。

「スバル? それにティアナに……………」

エリオ、キャロ、ルーテシア、シャーリー、ザフィーラを除いた守護騎士達、ナンバーズの更正メンバー。それにヴァイスやアルト、ルキノ、ギンガ等。

多くの招待客がそこにいた。

「だけど、やはりヴィヴィオの姿は無い。」

「なのはさん、今日はご招待、ありがとうございます」

行儀の良い挨拶をするのは、エリオとキャロ。それに倣ってか、他の皆も次々と声を上げた。

次に、スバルが元気良く言った。

「なのはさん、実はうちのお父さんもクリスマスのことをちょびつと知ってみたいで、こんな本をくれたんですよ」

「それって、絵本？」

それは、クリスマスを題材とした古い子供向け絵本だった。スバルの家系は先祖が地球人だから、おそらくその頃に持ち込まれたものだと思われる。

「ねえねえティア、知ってる？ クリスマスの日には、サンタさんって人がプレゼントを皆に配っててね、トナカイ達だって名前が」

「あーもう、その話は後でいいでしょ！？ それより絵本はしまっておきなさいよ。それ、ヴィヴィオへのプレゼントでしょ？ 見つかっちゃうわよ」

興奮気味に話すスバルを制したのは、鼻をすすするティアナだった。スバルとティアナのコンビも相変わらずのようで、なのはは思わず気持ちが和んだ。

しかし、その気持ちもすぐに霞んでいく。今はヴィヴィオを探し出すことの方が何よりも大事だった。

そんななのはの心情を感じ取ったのか、スバル達が首を傾げた。

「あの……なのはさん、どうかしたんですか？」

ミッドの街中に建つ一軒の店から、ヴィヴィオが出てきた。ヴィヴィオは両手でピンク色の紙袋を抱え、満足そうに微笑んでいた。

「済んだかい？」

アルフが問いかけると、ヴィヴィオは大きく頷いてから再びソリに乗り込んだ。

「では急ごう。主達も既に集まっているはずだ」

「遅くなっちゃったから、なのはママ、怒るかなあ？」

目的を済ませたヴィヴィオは、帰りのことをようやく気にし始めた。さっきまで自分の欲求だけに集中していたせいも、いざ他のことに気を向けてみると、いろいろな不安要素が幾つも見つかったのだろう。

「まあ……ごめんなさいは必要かも、ね？」

「大丈夫だ。誠心誠意をもって謝れば、必ず伝わるだろう」

「……………はい」

アルフとザフィーラがさっそく出発をしようとする、突然、市街巡回中の管理局員が、人の波を掻き分けてやって来た。

「こら。君みたいなのがこんな時間に一人でふらふらしていちゃダメだぞ」

「一人じゃないもん。トナカイさんと一緒だもん」

「ペットじゃなくて、ちゃんと保護者の人と一緒じゃないとね」

あっちゃん、まずいね。ザフィーラ、誠心誠意で謝る？

ん、むうう……………

二人の会話のやりとりを知らぬ管理局員は、ポケットからペンと調書を取り出し始めた。

ちょうど、その時だった。

「あー！ いたいたあ！ ヴィヴィオー！」

突然聞こえた大きな声に、ヴィヴィオは怯えた様子で肩を跳ねさせた。そして、管理局員もその声の方に視線を向ける。

ヴィヴィオ達の方に駆け寄ってきたのは、スバルとギンガだった。口から吐く息は真夏の雲のように白くて濃い。それに若干だが息が荒くなっている様子から、ここに辿り着くまで散々走り回っていたんじゃないかと思える。

声を聞いた瞬間は怯えていたヴィヴィオだが、その声の主が見知

った顔であることを知り、すぐに安心した笑顔を浮かべていた。

「あ、あの」

「いやー、すいません。この子、ちょっと目を離れた際に迷子になっちゃって、私達探してたんですよ」

「はあ」

「あ、えつと私、時空管理局員のスバル・ナカジマです」

「同じく、ギンガ・ナカジマです」

スバルとギンガは、同時に局員手帳を見せた。

すると、巡回中の局員も厳しい表情をようやく緩めた。

呆気にとられるヴィヴィオとアルフとザフィーラを尻目に、スバル達は軽快な会話を交えながら、迷子の引き取りをあっさり了承してもらった。

ようやく恐怖から解放されたと、ヴィヴィオはため息を一つ。

しかし、すぐに頭上から小さな拳骨が落ちてきた。拳骨の主はスバルだ。

「ごめんなさい」

「なのはさん、すっごく心配してるよ？」

「まあまあ、無事見つかったんだし。それに、ちゃんとボディーガードも付いてくれたんだから」

そう言っただけでギンガは、アルフとザフィーラを見た。

そして、ギンガの視線はそのままヴィヴィオ達の姿に着目したようだった。

「何それ？ コスプレごっこ？」

「あー！ ヴィヴィオ、もしかしてその格好は！？」

ギンガの質問を打ち消すかのように、スバルが大声を上げた。そして、ヴィヴィオのように目を輝かせている。

「そうです。ヴィヴィオサンタとトナカイさんです」

「つかあー！ やっぱリー！ いいなー、私もやりたーい！」

笑顔を引き攣らせるギンガの横で、スバルはすっかり舞い上がっていた。

「じゃあスバルさんは、トナカイ役ね」

「えー、サンタがいい」

「トナカイで」

ヴィヴィオはしっかりとソリに掴まり、待機状態へと入った。

それを見たスバルとギンガは、仕方が無いとお互い笑い合っ
て、バリアジャケットを装着した。

彼女達の足元には、それぞれローラーブレード型のデバイス、マ
ツハキャリアバーとブリッツキャリアバーが装着されている。

それを見たアルフが、慌てて口を挟んだ。

「あんた達、市街地内での魔法発動はまずいんじゃないの？」

「へっへーん。迷子の搜索任務だもーん」

呆れた様子のザフィーラとアルフだったが、しかし、すぐに諦め
た様子で、走り出す準備をした。

そしてスバルとギンガも、それぞれ手綱を掴んで、ソリを引く準
備に入る。

「ヴィヴィオ、トナカイさんには名前があるって、知ってる？」

「そうなの？」

大きく頷いたスバルは、ザフィーラを指差して言った。

「ダツシャー」

続いて、アルフ。

「ダンサー」

ギンガは。

「プランサー」

そして自分を指差して。

「ドンダー」

四頭のトナカイは、各々の足に力を込めて、空を見る。

街行く人々が何事かと見守る中、トナカイの足元には四つの魔法
陣が展開されていた。

目的地は、サンタを心待ちにする人のもと。絵本に描かれた話の
とおり、サンタを乗せたソリは空を飛ぶものだ。

「ウイングロード！」

並行して走る光の道は、ミッドの夜空に弧を描く。

爪を大地に食い込ませ、車輪が火花を撒き散らし、ヴィヴィッド
サンタのソリは行く。

「しゅっぱーっ！」

大きな掛け声を合図として、人々の歓声を真下から受けながら、
聖夜の空を不思議な一団が駆け抜けていった。

しばらく進んだところで、異変が起こった。

スバルとギンガのウイングロードが効力を弱めていき、徐々に地
面へと高度を下げたのだ。

「ありゃ？」

そればかりか、飛行魔法を発動しようとしたザフィーラとアルフ
でさえも、空を飛ぶのが急激に困難になった。

「どうしちゃったのかな、空が飛べない」

勢いよく出発したものの、ソリは速度と高度を落として、再び街
中に着陸してしまった。

「ウンともスンとも言わなくなっちゃった」

「……………AMFか」

「やっぱり、許可無く魔法を使ったのはまずかったかな」

さすがは魔法世界の中核を担う都市と言っべきか。不要と判断さ
れた無許可の魔法は、その効力をすぐさま抑えつけられてしまった。

「ごめんなさいサンタさん。終点です」

「えええええ！」

全員が諦めかけていたところ、なんと救いの女神達がやってきた。

「おーい！」

「ん？」

サンタとトナカイ達に近づいてきたのは、新たなトナカイ達だっ
た。

すなわち、ナンバーズ更正メンバーのうち、ナカジマ家に引き取られた組。

「トナカイヴィクセン、チンク！」

「トナカイブリッツェン、ノーヴェー！」

「トナカイキューピッド、デイエチ！」

「トナカイコメット、ウエンデイ！」

「参っ上！」

名乗りと共に各々が珍妙なポーズを取ると、それを見ていたギンガとアルフとザフィーラは笑顔を引き攣らせた。

しかし、スバルとヴィヴィオだけは大喜びだ。

「おお、皆来てくれたんだあ！　じゃあトナカイバトンターツチ！」

「了解ッス！　さあさあ、サンタクローヌはこちらのソリにお乗換えッスよお」

そう言つてウエンデイがヴィヴィオを促すと、自身の固有武装であるライディングボードにヴィヴィオを移した。

続いてノーヴェエが自身の能力『エアライナー』を発動させ、空に黄色の道を作り出した。

魔法とは違う、AMFの影響を受けない彼女達ならではの道だった。

「とつとつうちに帰らないと、せつかくの料理が冷めちまうよ」

「では改めて……………」

「HO！　HO！　HO！　しゅっぱーっ！」

世界一危険なソリと、重武装のトナカイたちに連れられて、ヴィッドサンタのソリは行く。

しばらく進んだところで、異変が起こった。

夜空に伸びる光の道をトナカイナンバーズのソリが走っていると、突然前方から人影が飛んでくるのが見えたのだ。

「なんだ？」

「管理局員だ」

サンタたちの目の前に立ち塞がった管理局員は、厳しい表情を浮かべながら着陸するように命じてきた。

再び見舞われた突然のトラブルに、ヴィヴィオは不安そうな顔を浮かべる。

「ダメだよ、街の中であんなものを使うなんて。危ないだろう」

「い、いや、コレは魔法じゃなくて、インヒューレントスキルだから許可は要らないだろうと思って」

「いや、普通に考えたらダメでしょ？」

「うるせえな！ これは魔法でもデバイスでもなくて、固有武装なんだからいいんだよ！」

「武装なの！？ じゃあもつとダメでしょ！」

ノーヴェの余計な一言に、他のトナカイ達は白い目を向けた。

そんな中、ヴィヴィオは腕の中の紙袋をぎゅっと抱き締める。

頭に浮かぶのは、ちゃんと家に帰れるのかという大きな不安だ。

その不安が大きくなるにつれて、なのはを恋しく思う気持ちも膨れ上がっていく。

「ママア……………」

赤と緑のオッドアイが、次第に潤んできた。せつかくのクリスマスカラーが、悲しみに染まるうとしている。

そんな時だった。

彼女達の目の前に、徐々に近づいてくるエンジン音があった。

最初は街中の喧騒かと思ったが、そうではない。どんどん自分達の方に近づいてくるそれは、眩しいヘッドライトをこちらに向けているのだ。

ヴィヴィオは眩しさのあまり、紙袋で顔を覆い隠した。

真っ暗な視界の中、耳だけを頼りにして周囲の状況を知ろうと務めると、そこには聞き覚えのある声があったのだ。

「まったく、何してるんだか、あんた達は」

この声。ヴィヴィオは、すぐに笑顔を浮かべて紙袋をどかした。目の前にいたのは、スポーツタイプのオートバイに跨ってフルフェイスヘルメットを小脇に抱えた、ティアナ・ランスターだった。「余計な手間を掛けさせないでね」
「ティアナさん！」
「さあヴィヴィオ、帰るわよ」
鼻をすすりながらそう言ったティアナは、ヴィヴィオにヘルメットを渡した。
「私の可愛いトナカイ、ルドルフMZF R1が、可愛いサンタさんをちゃんと送り届けるから」
そう言ったティアナの鼻は、寒さと風邪のせいで真っ赤に染まっていた。

エピソード

太くて遅しいエンジン音に気が付き、高町なのは家の玄関を飛び出していった。

いつの間にか、空からは白い粉雪が降り始めていた。家の中から何も持たずに飛び出したせいで、スリッパを引っ掛けた素足が痛いくらいに冷える。

「ママア！」
そんな中で聞いた確かな声は、彼女が待ち望んだサンタクロースの声。

言葉も無いまま、飛び込んできた小さなサンタを抱き締める腕は、いつまでも力を緩めなかった。

そして、高町なのはに送られる、サンタクロースからのプレゼント。

「ねえママ、はいどうぞ！」

ピンクの紙袋に包まれていたものを差し出されると、なのはは頬

を赤らめて微笑んだ。

それは、赤と緑のリボンが二つ。

「これを髪につけてね！」

大切な娘を思わせる、小さな小さなクリスマスプレゼント。

なのはは何度も頷いた。

なのはから彼女へ贈り物をしたと思っていたのと同じ、ヴィヴィオもまた、なのはに贈り物がしたかったのだ。

怒りたい気持ちも、泣き出したい気持ちも、不安も、恐怖も、何もかもが吹き飛んだ。

聖なる夜には祝福を。チキンにケーキにプレゼント。

さあ、家の中へ入ろう。

メリークリスマス。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7328z/>

ヴィヴィッドサンタとトナカイ物語

2011年12月24日10時46分発行